

課外授業体験記

国立小倉病院

瀬ノ口 恵美

私が病院に就職して、はや4年が経過しました。当初は仕事に慣れず、右往左往していましたが、新しい勉強の連続で充実した日々を送っていました。しかし、今日では分娩件数が減少し、私の職場も小児科と産科の混合病棟になっています。そんな現実と、妊産婦のお産に対する高い要求のはざまで、「私たち助産婦のすべきことは何か、どうすればより良いケアができるか」と悩み、考えさせられる毎日です。

そんなジレンマの中で病院を退職し、助産院を開業されたのが、この随筆を紹介して下さった先輩、岡本雅弥さんでした。

助産院のお産

ある夜23時30分頃、電話が鳴りました。岡本さんからです。「お産なんだけど、手伝いに来てくれない?」。学生時代に助産院での分娩見学ができず、残念に思っていた私は期待に胸を膨らませ即座にかけつけました。助産院に到着すると、すでに分娩第2期が近い様子。まずは、産婦とのコミュニケーションを図りながら腰のマッサージです。ふとアナムネを覗き込むと、前々回帝王切開、前回は1800gの未熟児を自然分娩で出産された方でした。ここで少々不安がよぎったものの、その思いを振り切り、分娩に集中。

子宮口開大が8~9cmとなり、いよいよ分娩の準備にとりかかります。防水シートを2枚敷いただけの普通のベッドに産婦に上がってもらい、外陰部消毒を行ないました。産婦の周囲には、その消毒用ベースンとセーレ、コッヘルなどが入った

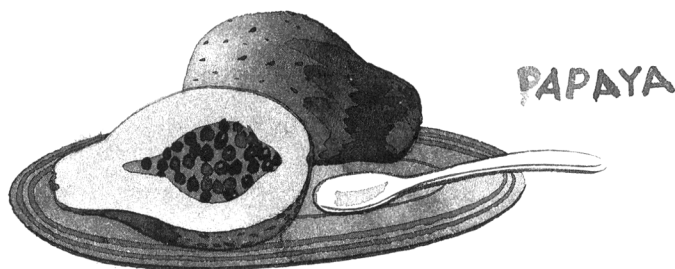
ベースン、そしてガーゼ袋ぐらいしかありません。病院と異なり、モニターや点滴に縛られず、とても自由な感じがします。これが本当の自然分娩だと私が感銘している間に、0時24分、子宮口が全開しました。徐々に、アットホームな助産院にも、緊張した雰囲気が張りつめてきました。

岡本さんに「心音を聴いて」と言われ、今まで使用したことのないトラウベを渡されました。ドップラーと違って簡単に聴き取れず、結局聴き直してもらいました。心音がやや低下しているように感じ、心の中は怪しい雲行きに変わりました。しかし、私はそんな素振りを見せないようにいきみを逃させたり、活力を与えるため、ホットミルクを飲ませたりしていました。

そして、0時48分、2600gの女児が誕生。

しかし、赤ちゃんは全身チアノーゼで筋緊張、自発呼吸とにもない状態でした。残念なことに、先程の私の予感はお的中してしまったのです。私は急いで血液を拭い、背部や足底を刺激しました。でも、全く変わりません。酸素もないこの場所でどうすればよいか戸惑っているときに、岡本さんは冷静に赤ちゃんを逆様にし、2~3回叩きました。その後、すぐ吸引しましたが、それでも状態は改善しません。産婦にも焦りと不安が募ります。

そんなとき、「氷水を持って来て!」という岡本さんの一声がありました。私は言われるがまま準備し持っていくと、岡本さんは赤ちゃんの体幹に勢いよくかけました。すると、どうでしょう。赤ちゃんは一体何が起こったのだらうというような



顔をし、目をパチクリと開け、泣き出したではありませんか。私はその光景に釘付けになりましたが、息つく暇もなく「次はお湯を！」と言われ準備しました。けれども、すでにそれをかける必要はなく、赤ちゃんは元気に泣き続け、見る見るうちに全身はピンク色となりました。

「低体温にしてはダメ」と頭ごなしに教えられてきた私にとって、その一瞬の出来事はまるで魔法をかけられたかのようなものでした。あのときの赤ちゃんの表情は、今でも鮮明に脳裏に焼きついています。

水中出産

もう一つ心に残っているのは、やはり岡本さんからお電話をいただいて立ち会った、家族が見守る中で新しい生命が誕生することへの尊さや喜びを皆で共感し、心温まる思いをした水中出産です。

産婦は自宅で誰よりも信頼できる夫と家族に囲まれて、音楽を聞きながらリラックスしている様子でした。微弱陣痛で体力の消耗が激しいので、ベランダやベッド、ソファなど、好きな所で好きな体位でいきみを逃しています。徐々に手を握る力も強くなり、大粒の汗が吹き出ってきます。私も呼吸法の指導に夢中となり、自分が一緒にお産をしているかのような気分になってきました。

ようやく分娩にこぎ着く所まで来ました。以前、岡本さんより「水中出産では、穏やかな顔をして、あまり泣かず、静かな呼吸をして赤ちゃんは出てくるのよ」と聞かされていたため、私の期待は高まります。

塩を入れ、湯を一杯にはった浴槽に産婦と夫が入ります。産婦がいきみを逃しているうちに、少しずつ児頭が見え、プクッと赤ちゃんが水中から浮かんできました。すると、穏やかなという表現とは程遠く、赤ちゃんは元気な産声をあげました。そのわが子をお母さんは優しく抱きしめ、お父さんはその2人を温かい表情で包み込んでいます。その姿を眼の当たりにし、私は胸がジーンと熱くなり、かつて味わったことのない感動を覚えました。

お産というものがこのような身近な出来事として存在すると、赤ちゃんが突然来たという感じでは決してなく、ごく自然に家族の一員として溶け込んでいくということを教えられました。

「お産の鉄人」の諸先輩へ

まだまだ病院で学ぶことも多い未熟者ですが、私にとってこの2例の分娩は大変新鮮で、かつカルチャーショックでありました。まるで知恵の宝庫のようで、もっと教えていただきたいと切に感じました。

産婦と胎児とが持ち合わせる自然の力を最大限に引き出し、経験により培われてきた技や知識を備えた「お産の鉄人」というべき諸先輩方、機会があればぜひ私たちに御指導の程をお願い申し上げます。

今回は、看護学校、助産婦学校の先輩であり、現在二児の母となり育児奮闘中の、野田深雪さんを紹介させていただきます。